

私らしく生きること

南相馬市立鹿島中学校 3年 榎内 楓

私は、トランスジェンダー女性です。身体は男性として生まれましたが、心はずっと「女の子」として生きていたいと思っています。

幼稚園の頃からアナ雪が好きで、スカートを履いて遊ぶこともありました。そのときの担任の先生が「そうくんの個性だから、大人になっても伸ばしてあげて」と言ってくれたことを母は覚えてくれていました。母はその頃から、「もし、そうが心の性別を女の子だと言ったら、ちゃんと受け入れよう」と思ってくれたそうです。

小学校高学年になると、自分の性別に強い違和感を覚えるようになりました。心は女の子なのに、周りからは「男の子」として扱われ、制服も男用しか着れません。本当はスカートを履きたいのに、言い出せる雰囲気はありませんでした。中学生になり、私は母にカミングアウトすると決心しました。ラインで「私は女の子として生きていたい」という気持ちを必死に打ち込みました。送信ボタンを押すと手が震え、心臓がドキドキしました。母から返ってきたラインは長文で、私の気持ちに寄り添ってくれる内容でした。幼稚園の頃から私の個性を見守ってくれていたことが書かれていました。「世の中にはいろんな人がいて、自分らしく生きるなら全然それでいい。」と言ってくれました。母は「どんなそうも大好きで味方だから大丈夫」と書いてくれて、私は初めて心から自分を認めてもらえたと感じました。

母に支えてもらえたことで安心でき、少しずつ友達にも話せるようになりました。初めて打ち明けた友達は、「自分がやりたい事やった方がいいよ」と自然に言ってくれました。その一言で、世界が少し優しく広がった気がしました。今の学校生活にまだ不安もあります。トイレや更衣室に入るときは緊張しますが、先生に相談して対応してもらっています。今は、小学生の頃より自分らしくいれるようになりました。髪は伸ばせなくてもウィッグやエクステを身につけたり、メイクをしたり、可愛い服を着たりできることは大きな喜びです。小学生の頃は心の中でしか描けなかった「なりたい自分」に少しずつ近づけています。

この体験から、「ジェンダー平等」とは単なる男性と女性を同じに扱うのではなく、一人一人の違いを尊重することだと学びました。母や友達のように「そのままでもいい」と受け入れてくれる人がいるだけで心が軽くなり、前を向いて生きようと思えます。

日本ではまだ性の多様性への理解が十分ではありません。「男の子はこう」「女の子はこう」という概念で決めつける場面があります。だから大切なのは、相手の立場を想像

することです。もし自分が心と違う性別の名前で呼ばれ続けたらどう感じるでしょう。その気持ちを想像することができれば、人の言葉や態度はもっと優しくなるはずです。そして小さな不公平や差別に気づいたら、「それはおかしい」と言える勇気が必要になります。小さな声でも積み重なれば、社会を変える力になると思います。

私はこれからも、自分らしく生き続けたいと思います。自分と同じように悩んでいる人が「一人じゃない」と思えるように小さな行動を重ねていきたいです。ジェンダー平等とは、一人一人の個性や生き方を尊重すること。その実現が人権を守ることに繋がると思います。

世界は一つの花だけではありません。たくさんの花が咲いて、美しい花畑を作ります。私もその花の一輪として、この社会を彩っていきたいです。そう願いながら、私は今日も「自分らしさ」を胸に歩んでいます。

未来の社会は、もっと誰もが安心して自分を表現できる場所になってほしいと思います。そのためには、私だけでなく、「ちがうから面白い」と受けとめ合える関係が広がれば世界はもっとあたたかくなるはずです。私の願いはシンプルです。誰もが笑顔で自分の好きな花を大切にできること。そうした社会をつくるために、私はこれからも声を上げ、小さな一歩を踏み出し続けたいと思います。